



Title	存在・本質・力能：スピノザ形而上学における一義性と同一性
Author(s)	藤野, 幸彦
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61406
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名(藤野幸彦)	
論文題名	存在・本質・力能——スピノザ形而上学における一義性と同一性——

論文内容の要旨

本論文は、17世紀オランダの哲学者バルーフ・デ・スピノザ (Baruch de Spinoza : 1632-1677) がその主著である『幾何学的秩序により論証されたる倫理学』(以下『エチカ』と略起)において展開した形而上学体系を、存在existentia・本質essentia・力能potentiaという三つの概念とその関係を中核に据えたものとして解釈し、提示する試みである。

ここで言う上記三項の関係は、その一が他と同一である、またあるいは一が他そのものである、という仕方で明確に『エチカ』において示されている。にも拘らず本稿がこれを「存在・本質・力能の同一性」として取り上げるのは、この同一性がスピノザに独自の、特異な仕方で現れるからに他ならない。

実際のところこの一致に関する主張は、その文言のみを取り上げるならば西洋哲学の伝統、特にスコラ哲学の系譜に依拠する限り、別段珍しいものでもない。それどころか、本質essentiaと存在esseが神において一致することは常識的な見解ですらあっただろう。しかしそこには、常に「存在のアナロギアanalogia entis」という問題が影の如く寄り添っていた。対するスピノザは、徹底して非アナロギア的一致を示そうとしていたように思われる。即ち、現実存在existentiaとしてのみ理解された存在、「現実存在の一義性」における「存在・本質・力能」の一致。これこそがスピノザ形而上学の核心であり、革新である。これを明示することを本論文は目的とする。

とはいっても一方、スピノザ自身が「一義性univocitas」という概念を我々に明示して語ることではなく、またその仕事が一義性の「証明」ではなかったが故に、この図式は見え辛くなっている。しかし『エチカ』の内外で示されるテーゼを丹念に辿るならば、疑いの余地は残らない。これが本論文の見込みである。周到かつ入念に、彼は現実存在の一義性を貫徹しようとしていた。本論文はこの貫徹を跡付けることで自身の解釈の正当性を主張し、一義性と同一性の体系として『エチカ』を定位する視座を提供する。

本稿は全三章から構成され、各章ごとに「現実存在について」、「本質について」、そして「力能について」、とテーマが与えられている。即ち『エチカ』の中心部で一致するところの三項が、如何に一義性に向かって定位されているか。このことを順に示すことで本論文は進行する。その概略は以下の通りである。

第一章：現実存在について

全論に渡る問い合わせを、本稿はスピノザにおける永遠性aeternitasの問題から始める。スピノザにおける永遠性とは何を意味するのか。この概念は自身と対置される持続duratioと共に、現実存在の二つの在り方としても定位されていた。このことを踏み板に、永遠性と持続という対概念の内実から現実存在の把握へと向かう試みを本稿は行う。

初期の著作『形而上学的思想』においてスピノザは既にこの永遠性と持続の問題を論じていた。その中では、本質の有esse essentia、また現実存在の有esse existentiaというスコラの教説に由来する概念がそれぞれ永遠と持続に対応するものとして論じられる。しかし他方、『エチカ』と『形而上学的思想』には存在概念の扱いに明白な差異があり、それ故にスコラとの対照において『エチカ』の内実が明らかにされうることを本論文は示す。

スピノザは如何なる問題圏の中で自身の学説を練り、どのような革新をそこにもたらしたのか。本論文はスアレスの著作『形而上学的討論集』を参照することで、スピノザとスコラの差異を測る基準とし、またその存在概念が明確な多義性を含むことを確認してこれを特徴づける。加えて、本稿は永遠性と持続という両概念についてもスアレスやデカルト、ヘーレボールトらの議論を確認し、近世における持続論を扱う。その中で彼らが永遠性を神の持続として扱った結果、スアレスにおいて確認された存在概念の多義性が、近世スコラの議論においては持続の多義性としても現れていることを本論文は示す。対するスピノザが神の持続を明確に否定する文脈を有しており、ここに対立の構図が明らかになる。

スコラにおける存在概念と持続概念の多義性は何に基づくのか。その根拠を「存在のアナロギア」として指摘すべく本論文はアクィナスによるアナロギア論を確認し、スアレスの持続論がこのアナロギアに依拠する仕方で論じられていることを示すことで、上述の存在と持続の多義性を「アナロギア的多義性」として明確化する。

スコラの議論に見られる多義性の一方、『エチカ』においてスピノザが「属性の一義性」を主張することを本論文は示す。またこの議論を足掛かりに「持続の一義性」をスピノザの体系から取り出し、本論文は永遠性と持続という問題に回答を与える。またこれらの一義性を下、スピノザにおいて同様に「現実存在の一義性」が目指されるべきものとして解釈の課題となることを示し結論とする。

第二章：本質について

スピノザが「現実存在の一義性」を追求するとすれば、現実存在と本質の同一性、というテーゼは如何に解されるべきか。アナロギアなしにこの同一性を語るロジックが『エチカ』には必要である。『エチカ』における実体 - 属性関係、また実体 - 様態関係の解釈によりこの要求は答えられるべきことを本論文は示し、その内実を検討する。

『エチカ』において属性は実体の本質を構成すると同時に、その本質を表現するものとされる。この関係は実体と属性の一対一関係、そして神と無限数の属性の関係のそれぞれにおいて如何に成立するのか。現実存在の一義性の貫徹として、ただ一つの現実存在においてその関係が理解されうることを本論文は明らかにする。

ただ一つの現実存在においてあらゆる事物を捉えること。これが可能ならば、一義性は実体と様態の関係においても同様に達成される。本論文では既存の研究において提示されている解釈を検討し、それらの不十分さが現実存在の一義性を保持しえない不徹底さにあることを指摘する。即ちしばしば指摘される内属という関係は、既に存在の多義性を含意しているのである。スピノザが偶有性概念を放棄した理由もまた、ここに認められるだろう。対して様態は、それ自身に固有の存在性を持たないものとして規定されうる。このことをスアレスやヘーレボルトの議論から取り出すことで、本論文は様態概念に込められたスピノザの含意を読み解き、これが正しく現実存在の一義性を目指して用いられた概念であることを確認する。

他方、様態が固有の存在性を持たないということは、様態として規定される諸個物の現実存在が、如何にして個別のものとして考えられうるか、という新たな問題を惹起する。本論文は様態と様態が区別されることの理論を検討し、また『エチカ』において様態という概念により根底的には如何なる存在者が指定されていたかを明らかにする。その解答は、様態という語により名指されるものが神の活動作用、また因果作用であるということ。またそうした作用において諸様態の区別が理解されるということである。スピノザの自然学の議論を経由することでこのことは明らかになる。加えてこの区別の理論こそスピノザの体系において諸様態の本質を規定するものであることを論じ、現実存在と本質、そして力能の一致が、個物の存在という水準で達成されることを確認する。

これに加え、神の活動作用こそ神の力能として名指されるものであることを本論文は指摘し、ここにおいて「存在・本質・力能の同一性」が神という水準においてもまた達成されることを明示する。このことは一応の結論となるが、しかし、ここにはなお「自己原因」という問題が残されていることが示される。

第三章：力能について

神自身ならびにあらゆるものは、神の力能により在りかつ活動する、とスピノザは言う。この神の力能において、「自己原因」とは如何にして位置づけられるか。このことが『エチカ』にも提示されたアприオリな神の存在証明の可能性として問われねばならないこと、また「原因の一義性」の故に、神の自己原因是神による諸事物の産出と同じ構造において理解されねばならないことを本論文は示し、神の力能論を産出の原因論として扱う準備を行う。

スピノザ自身が「自己原因」について『エチカ』の中で説明することは殆どない。そのため本論文ではスピノザの初期著作から関連する議論を取り出し、スピノザ自身の議論を補足する。加えて、神のアприオリな証明の可能性についてはスピノザと異見を異にするアクィナスやスアレスの議論においても、神が自身の力能により現実存在すると見做されている点では共通することを示し、「自己原因」問題を扱う足掛かりとする。

また一方、そもそも「自己原因」とはいかなる問題であったのか。デカルトとカテルス、またアルノーの間の論争を参照し、本論文はその争点を確認する。彼らの論争は根底において同種のアナロギアを前提としており、それ故にスピノザにおいてこそ「自己原因」とは真の問題として現れることが本論文では主張される。

『エチカ』において諸事物の産出は如何なる構造の下で説明されるか。その上で更に「自己原因」が同じ構造の中で理解されうるか。これが最後の問い合わせである。しかし神の力能が非アナロギア的力能であり、また「原因の一義性」が保たれる限り、「自己原因」を可能とする根拠は『エチカ』の中にはない。他方またしかし、それ故にこそむしろ「原因の一義性」は『エチカ』において要請されるべきものであることを論じ、本論文全体の結論とする。

以上の議論により、一義性の貫徹においてこそスピノザにおける「存在・本質・力能の同一性」は理解されるべきこと、またそれ以上に、この一義性と同一性はむしろ同じものであること。これらが示されたならば、本論文はその目的を達したと言えるだろう。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名 (藤野幸彦)	
	(職) 氏名
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授 上野修 副査 大阪大学 教授 入江幸男 副査 大阪大学 教授 須藤訓任
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 存在・本質・力能—スピノザ形而上学における一義性と同一性—

学位申請者 藤野幸彦

論文審査担当者

主査 大阪大学教授	上野修
副査 大阪大学教授	入江幸男
副査 大阪大学教授	須藤訓任

【論文内容の要旨】

本論文はバルーフ・デ・スピノザ (Baruch de Spinoza 1632-1677) の形而上学を正面から取り扱った労作である。全体で 225 頁、序と三つの部および結論からなる。スピノザは「神即自然」の哲学で知られる。それによれば、実在するのは神と呼ばれる絶対的に無限な実体のみであり、すべてはそのうちに様態としてある。本論文はこの特異な形而上学を当時の近世スコラ哲学を背景に分析し、一義性と同一性の哲学として解明しようとするものである。「一義性」とは産出する神と産出される事物についてその存在が同じ意味で語られるということ、「同一性」とはそうした神即自然において存在と本質ならびに力能が同じ一つのものだということである。本論文は一義性と同一性をいわば二つの座標軸として設定し、いかにして伝統的にはひとり神にのみ認められていたそのような同一性が、これまた伝統的な「存在のアナロギア」の否定としての一義性に即して事物にまで及ぼされるに至ったかを、スピノザの『エチカ』や『形而上学的思想』の詳細な分析を通じて描き出す。

以下、各部ごとに概略を述べる。

第一部「現実存在について」はトマス・アクィナスを引き継ぐ近世スコラ哲学のスアレスやヘーレボルトの所説との比較検討を通じて、スピノザにおける存在の一義性を「持続の一義性」として明らかにする。当時の所説では事物の本質は潜勢態において存在し、これが現勢化するとき持続と言われる現勢的な存在となる。片や神においてはその本質と存在は同じ一つのものであり、この存在を当時の所説は永遠性と見て事物の持続存在と区別していた。こうした存在の多義性の解消がスピノザの目論見であることを示すこと、これが第一部の課題とされる。それによれば、事物の本質は神の力能に永遠真理として常時含まれて存在し、この本質存在が事物の持続存在として現勢化される。こうした存在は神と事物にわたって一義的な属性において現勢化される以上、神と同じ永遠性を持っているとされる。

第二部「本質について」は神における本質と存在の同一性と同様の同一性が事物においてもまた言われうることを論じる。ヘーレボルトの火の熱が火自身から生じるという例で示される流出因が分析され、これとの類推を通じて、スピノザにおいて様態としての事物は神的実体への偶有的な付加物ではなく、神的実体の非媒介的な活動作用そのものであることが示される。事物の存在はこうした活動の一種の力の場において様態的にのみ区別され、実体的には区別されない。そして「神がしかじかの様態に変状されている限りでその神が…」という『エ

チカ』に頻出する副詞節は、様態としての事物を神の活動作用の副詞的限定として解釈する可能性を示すものと提案される。延長属性における物体の「運動と静止」はそのように副詞的に限定された活動作用の表現であり、事物の現実的本質としての「コナトゥス」であって、現実的本質は事物の現実存在と異なるとされる。

第三部「力能について」は神の自己原因をめぐる当時の論争との比較検討を通じて、スピノザにおける原因の一義性を示そうとする。トマスやスアレスのスコラ的理解では、神は自らの力能によって存在するがゆえに事物の場合のようにそれを生み出す起成因を持たないとされていた。神を自己原因とするデカルトの主張はそれゆえに論争を呼ぶが、デカルトの真意は、神は無原因ではなくその形相因がアナロギアによってそれ自身の起成因のごとくに見なせるということに存する。スピノザはこうした原因のアナロギアを排し、「神は自己の原因であると同じ意味で事物の原因である」という原因の一義性を主張する。しかし一義性はアナロギアを否定するための純然たる要請であって、それ自身はスピノザ形而上学の内部では証明されず、それゆえに「自己原因」は『エチカ』冒頭に定義としてのみ置かれるのであると結論される。

結論部はスピノザにおける持続の一義性、属性の一義性、原因の一義性を振り返り、「現実存在の一義性」の貫徹されるところに「存在・本質・力能の同一性」というテーゼが姿を現すということを確認する。そしてこの哲学を「一義性と同一性の哲学」と特徴付けて終わる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文はスピノザの原典テキストのみならず、その背景となる近世スコラ哲学の形而上学に関わるラテン語テキストを多く参照し、これとの緻密な比較検討を通じて解釈を説得的なものにしている点に特色がある。スアレスやヘーレボルトなど近世スコラ哲学への参照はようやく内外で盛んになってきているが、スピノザ研究ではなお端緒的な段階にあると言わざるを得ない。そのことを思えば本論文の取り組みは今後の一つの方向性を示しており、大きく評価できる。テーマとされるスピノザの「存在の一義性」はドゥルーズ以降しばしば語られるところであるが、これを「存在・本質・力能の同一性」との関わりで本格的に論じた研究はまだ多くない。本論文はこれを体系的に扱っており、この点も大いに評価に値する。二つの座標軸を置くことはかえって議論を錯綜させて見せる結果を招いているが、これとて特に全体の整合性を損なうものではない。スコラ哲学との綿密な比較検討や問題自体の輻輳を思えばこれもやむを得ないであろう。ただ、特定の論証に関して疑問を感じさせるところがないわけではない。たとえば本論文は実体と属性のあいだの「理性的区別」と、存在と本質のあいだの「理性的区別」を同日に論じるが、それぞれの文脈を離れた議論はその妥当性を疑わせるものとなっている。また同一性をキーワードにする以上、前もってその概念のある程度厳密な分析があつてしかるべきであろう。実在的区別や様態的区別等の用語についても然りである。哲学史的に言えば、「存在の一義性」を扱っているのにドゥンス・スコトゥスへの参照がまったくないのも惜しまれる。また結論部において、『エチカ』の自己原因の定義の恣意性をスピノザの一義性哲学のそれ自身は根拠づけを持たない選択的な性格を示すものと解釈しているが、自らの哲学を最善の哲学ではなく真の哲学であるとするスピノザ自身の理解にとってそれがどういう意味を持つのか、もう少し掘り下げて論じてほしいところである。このようにいくつか不満な点がないわけではないが、すでに述べたように本論文はスピノザ研究の今後の発展性をうかがわせるのに十分な労作である。よって本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定する。